

私はハワイ大学の院生として一年間、十八世紀琉球における儒学についての研究をした。当時、ある現代日本史の教授に私の英訳した蔡温の「獨物語」のコピーを見せた。しばらくしてそれを読んだその教授は「蔡温は疑いなく自分の国を深く愛していた」という第一印象を私に語った。

琉球史の中の最も偉大なる儒学的為政者である蔡温が、長いキャリアの終わりから一七五〇年に「獨物語」という隨筆を著した。それに、政治や経済に関する自分の諸意見を述べたり、自分の業績を自慢げに自己評価している部分もある。しかし、そのハワイ大学の教授が言った通り、「獨物語」を読めば、蔡温の琉球への愛情というべき強い感情が明らかに伝わってくる。

琉球の一般的な政治や経済觀を理解するために「獨物語」が多分彼の最も大切な著作であろう。しかし、彼が取り上げた話題は政治、琉球社会のあらゆる面、特にそれが取り上げた過程へ

## グレゴリ・J・スミット 蔡温の琉球国家論

(上)

私は「獨物語」の中に著された蔡温の琉球国家論について論じたい。

「我が國（琉球）はそれ（本文からの拙訳）と蔡温

古琉球の王府が徐々に近世学者のご指摘のように、薩摩の支配下になつてから、の儒学に基づいた王府に変化は風水の立場から論じ始めほど力を持ついないが、琉球社会のあらゆる面、特えられていくという過程へ

中国と日本から課せられたかわらず、我が國はどうにか切りぬけられてきた」

（本文からの拙訳）と蔡温は風水の立場から論じ始めに論じた。しかし一般に、琉球では御道本法が殆んど普及していないなかにも地理が風水の立場から見つたにもかかわらず、琉球では御道本法が殆ど普及していないなかにも地理が風水の立場から見



## 「獨物語」の中で論じる

### 薩摩の間接的な琉球支配

と経済に関するものばかりでなく、もう一つの有意義なことについても論じていた。十七世紀の大政治家であった。それは彼の琉球国家論である。

一六〇九年、薩摩による琉球侵略の端緒は、薩摩の琉球侵略の責務がある。それについてにすぎないと一般に見なされれているが、蔡温の時代には、我が国の資源や力は充分には及ばない。しかし昔は風水は地理学と物理学の中間的な科学の一つの分野であり風水は偶然の状態にすぎない。

琉球は昔でもその当時でも、れっきとした国である。ここまでは、蔡温は琉球の国家としてのアイデンティティ問題の意識が強く、琉球は昔でもその当時でも、れっきとした国である。この点を述べていることが明らかである。むろん最も明瞭なのが、琉球の時代に初に風水に基づく証拠を挙げたが、一方では、琉球のイデンティティ危機を生じし続いているのは、まず我々が見なされていた。

琉球は、琉球にとっての仕事引き継ぎ、それを琉球支配によって蔡温は琉球し、その形は蜿蜒（えんえん）したる龍に似ている。また高良倉吉氏や他の歴史完遂した。宗教に基づいたの国家としての問題を考えるためには、「獨物語」の最も重大な転換点であつた。高良倉吉氏や他の歴史

の合理化を図るために尽力が明瞭である。むろん最も風水に基づく証拠を挙げたが、一方では、琉球のイデンティティ危機を生じし続いているのは、まず我々が見なされていた。

琉球は、琉球にとっての仕事引き継ぎ、それを琉球支配によって蔡温は琉球し、その形は蜿蜒（えんえん）したる龍に似ている。また高良倉吉氏や他の歴史完遂した。宗教に基づいたの国家としての問題を考えるためには、「獨物語」の最も重大な転換点であつた。高良倉吉氏や他の歴史

1989年6月7日

# 蔡温の琉球国家論

中

グレゴリ・J・スマツツ

蔡温の薩摩觀、特に薩摩なしという幸いな状況に至信的な宗教に基づいた王と琉球との関係のあり方を「つてきた」と薩摩をほめた。府、地元の強欲で堕落した

考えてみよう。蔡温は「昔現実をよく認めていた蔡温は我が国には政道は普及しておらず、農民は耕作を

油断したので必要な物が足りなくななり、道徳や習慣も悪くなつた。度々革命にならぬほどの騒動も興つたし、万民は皆困窮に陥るといつ

言語道断の状況があつた。だ。これはある程度正しいしかし薩摩の支配下になつてから、そのお陰で道德や習慣はよくなつ、農民も一生懸命に耕作に努めたの

で、國中、必要な物は不足琉球(侵略前の琉球)の迷

である。

い。

い。

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

蔡温は儒学的な世界の中の琉球の国家としての可能性を強く述べた。だが一方、薩摩の支配という問題はまだ残っている。具体的に言えば、薩摩を通して日本の幕藩体制に組み込まれた琉球がどのようにれっきとした一国として存在できるのか。儒学という普遍的な思想を通しての琉球と薩摩の関係はどうあるべきか、ということである。

蔡温は薩摩を「御国元」と称した。彼は薩摩が琉球の国としての存在を支えていることを論じた。薩摩が琉球の「元」という役割をどのように果たしていたかと云ふことは、朱子学の存在論と強い関係がある。蔡温は「國家」と云えば、大国、小国にかかわらず、陰陽五行が備わり、そして五倫四民の道が確立さればその

幕藩体制に組み込まれた琉球がどのようにれっきとした一国として存在できるのか。儒学という普遍的な思想を通しての琉球と薩摩の関係はどうあるべきか、とあるが、金と木がなければ

そのことは国家とは言えない。我が土地の場合は、金はないけれども森林資源がある。金は御国元(薩摩)から輸入でき、それにより不足がないので我が土地は昔から国と呼ばれている

だ。薩摩の支配といふ問題は幕藩体制に組み込まれた琉球がどのように入れっきとした一国として存在できるのか。儒学という普遍的な思想を通しての琉球と薩摩の関係はどうあるべきか、とあるが、金と木がなければ

そのことは国家とは言えない。我が土地の場合は、金はないけれども森林資源がある。金は御国元(薩摩)から輸入でき、それにより不足がないので我が土地は昔から国と呼ばれている

## 陰陽五行で森林を重視

このように、蔡温が森林資源を重視し、色々な森林対策を行ったことの一つの理由になる可能性がある。つまり五行為条件である「元」という動きを果たすことが、ここに見られる。

これは朱子学に基づく蔡温の思想で、「足りない」行を輸入できない「國」は五倫四民の資格の欠けている要

つて、いつたら本格的な国家になれる可能性がある。つまり五行為条件である「元」という動きを果たすことが、ここに見られる。

これは朱子学に基づく蔡温の思想で、「足りない」行を輸入できない「國」は五倫四民の資格の欠けている要

が作られた政治の正しい仕事のためだと言えると思う。(琉球史研究家)

足りない物を他国から輸入しながら安定した国家や社

会を必ず築き上げられる

ということがある。

以上は蔡温の琉球国家論の概要である。彼がどの程度それを本当に心底から信じていたかは、ここでは、別

の問題である。しかし、

これははつきりとは述べ

なかつたが「五倫四民」を

成し遂げるのは金を輸入す

るより難しく、立派な課題

と琉球の関係は「昔の聖人

行にはかなないと蔡温は

考えていたのである。蔡温

の琉球国家論における薩摩

と琉球の関係は「昔の聖人

行にはかなないと蔡温は

考えていたのである。

蔡温は勿論、琉球の金の

であるが分かるで

古琉球の社会に合わない思

想である儒学を、十八世紀

の琉球社会に押し付けてみ

たのだが、実は、それは彼

が自分の国を愛していただ

ためだと言えると思う。

(琉球史研究家)

足りない物を他国から輸入

しながら安定した国家や社

会を必ず築き上げられる「

以上は蔡温の琉球国家論の概要である。彼がどの程

度それを本当に心底から信</p